

チャールズ・ディケンズ 著

## 「チーズマン爺さん」

松岡光治訳

ぼくはまだ今のところ青二才なので<sup>(1)</sup>——毎年たしかに歳を取ってはいますが、まだまだ幼いので——お話の題材となるような特に珍しい経験があるわけではありません。この場で、校長の守銭奴ぶりやあいつの金庫番ぶりを、はたまたこの夫婦が生徒の父兄に法外な諸経費を——とりわけ散髪代と医療費を——吹っかけていることを知っていたいたとしても、どなたの興味も引くことはないだろうと思います。ぼくらの仲間の中に、半年分の請求書で丸薬二粒に対して、何と十二シリング六ペンスも要求された生徒がいました——一粒で六シリング三ペンスとはぼろもうけです——もっとも彼は二粒とも自分では飲まずに、上着の袖に飲ませたのですが。

学校のビールと来た日には、それはもう実にひどいもので、あれは絶対にビールなんて言える代物ではありません。本当のビールは血管のようなものではないでしょう。そもそも本物のビールならばかめるはずです。おまけに、本当のビールには肉汁が付いているのが普通ですが、ぼくらのビールには一滴も見当たりません。別の仲間が病気になるまで里帰りした生徒がいましたが、かかりつけの医者が彼の親父に言うには、病気の原因はビールでなければ説明がつかないとのことでした。もちろん原因は学校のビールでしたし、それもそのはず無理はありません。

しかし、ビールとチーズマン爺さんのことは全く別個の問題でありまして、ビールとてまたしかりです。ぼくがお話するつもりだったのは、実はチーズマン爺さんのことなのであって、校長夫妻のもうけ主義のために仲間の者たちが体を滅茶苦茶にされた経緯についてではないのです。

だって、まあパイの皮だけでも見てください。パリパリした所なんて少しもなく、ただ堅いだけです——湿った鉛のように。そのため、ぼくらの仲間たちは悪夢にうなされ、大声をあげて他の連中を起こしたかどにより、長枕を使ってぶちのめされるのです。それもそのはず驚くにはあたりません！

ある夜、チーズマン爺さんは夢遊病者よろしくナイトキャップの上から帽子をかぶり、釣竿とクリケットのバットをつかんで、下の客間へ降りて行きました。そこにいた校長夫妻が彼の外見から幽霊だと思っただとしても無理はありません。むろん、食事がちゃんとしたものだったら、彼もそんなことはしなかったでしょう。ぼくらがみんな夢遊病者のようになればどうでしょうか、彼らも済まないと思うかも知れません。

その当時のチーズマン爺さんはまだラテン語の副教員ではなく、ぼくらの仲間のひとりでした。彼が駅伝馬車に乗って最初にここにやって来たのはとても幼い頃で、絶えずかぎ

煙草をかいたり、彼を揺さぶったりする婦人に連れられて来たそうで——これが彼に思い出せる精一杯のことでした。彼は休暇が来たからといって実家に帰ることはありませんでした。<sup>(3)</sup> 授業料は(割増し金のことについて彼は全く知りませんでした)銀行に送られ、その銀行が代わりに支払ってくれました。年に二回は茶色のスーツを新調し、十二歳の時に初めてブーツをはいたのですが、いつも彼には大きすぎたようです。

夏休みになると、歩いて来れる所に住んでいた仲間の中には、わざわざチーズマン爺さんが運動場でぼつねんと読書している姿を見るために、学校に戻って来ては運動場の壁の外にある樹木によじ登る者がいたものでした。彼は学校のティーの味に負けず劣らず常に弱々しい感じでした——それは実にもう弱々しいかぎりだとぼくは思うのですが——それで彼らが口笛を吹くと、彼はすぐに顔をあげて会釈をしました。

「やあ、チーズマン爺さん、昼は何を食べたんだい？」彼らが尋ねると、彼は「マトンの煮込み料理だよ」と答えました。

「チーズマン爺さん、寂しくないかい？」と言うと、「ちょっぴり退屈な時もあるよ」と返答してくれました。

すると彼らは「それじゃあ、さようなら、チーズマン爺さん！」と言いながら木から降りました。

もちろん、チーズマン爺さんに休暇の間ずっとマトンの煮込み料理ばかりを出すのは、彼の人の善さに付け込んでのことでしたが、それはいかにもこの学校の特徴を表わしていると言えます。マトンの煮込み料理が底をつく、ごちそうだという触れ込みで米のプディングが出されました。肉屋の手間が省けるのだそうです。

チーズマン爺さんの生活はそんなふうでした。休暇になると、孤独の他にも彼には新たな頭痛の種ができました。仲間たちがいやいやながら学校へ戻り始めると、彼の方はいつも嬉しそうでしたが、彼の姿を見てもちっとも嬉しくないみんなにとっては、それがまた無性に腹の立つことだったのです。彼は壁に頭をたたきつけられ、そういう事情で彼の鼻から血が流れることになりました。それでも彼はみんなの人気者でした。一度などは彼のために寄付が募られ、意気消沈させてはいけないということで、休暇前に白ネズミが二匹、ウサギ、ハト、それにかわいい子犬がプレゼントされたことがあります。むろん、チーズマン爺さんは声をあげて泣きました——特に、その後すぐ動物たちが共食いを始めた時は。

チーズマン爺さんがあらゆる種類のチーズの銘柄で呼ばれたことは言うまでもありません。ダブル・グロスターマン、ファミリー・チェシャーマン、ダッチマン、ノース・ウィルトシャーマンなどがそうです。<sup>(4)</sup> しかしながら、彼は気にしませんでした。それに、ぼくは彼が老齢に達していたなんて言うつもりはありません——だって、本物の爺さんではないのですから——ただ、彼は最初からチーズマン爺さんと呼ばれていただけのことです。

とうとう、チーズマン爺さんがラテン語の副教員になる時が来ました。新学期が始まる日の朝、彼は連れて来られ、そうした資格を持つ「チーズマン先生」として学校みんなに紹介されたのです。それで、ぼくらの仲間たちは全員、チーズマン爺さんは密偵だ、敵

方の陣地へ寝返って金のために我が身を売った逃亡者だ、ということで意見が一致しました。我が身を売り渡した金が——報告によれば、一季ごとに二ポンド十シリングと洗濯つきだそうですが——雀の涙ほどだったからといって、言い訳にはなりません。その件に関しては議会が開かれ、チーズマン爺さんの金目当ての動機のみを考えるべきだ、あいつは「我等の鮮血をドラクマ貨幣に換えた」のだ、<sup>(5)</sup> という決議がなされました。その表現は議会がブルータスとキャシアスの例の言い争いの場面から採ったものです。

このように、チーズマン爺さんは自分の知っていることを全部ばらしてまで敵方の気に入られたかったのだ、そのつもりで仲間たちの秘密を巧みに引き出した恐るべき裏切り者だ、と強行採決されてしまいました。それで、勇気ある者はみんな前に進み出て、結束して敵に当たるべく協会のメンバーになることを要請されたのです。協会の会長というのはファースト・ボーイ棟梁生徒で、名前をボブ・ターターと言いました。親父は西インド諸島にいて、その財産たるや数百万ポンドだと彼は自認しておりました。そのため、彼は仲間たちの中では絶大な影響力があり、次のような文句で始まるパロディーを書いたこともあります——<sup>(6)</sup>

話し声がほとんど聞こえないほど  
おとなしいふりをしていただけ  
結局こそこそ告げ口をする密偵と  
判明したのは一体だれだったのか  
その名はむろんチーズマン爺さん

こんな調子で詩もどきのパロディーを十二篇以上も書き続け、毎朝、新米教師の机のすぐそばまで行って朗読したものでした。彼はまた、何をしても無頓着なブラスというバラ色の頬をした低学年の生徒を飼い慣らし、ある朝ラテン語文法の本を持って先生の所へ行かせ、次のように訳させたことがありました。<sup>(7)</sup> 「代名詞の主格は」——チーズマン爺さんは、「滅多に使われない」——決して疑われなかった、「区別または」——密告者であるなどと、「強調のため以外には」——そうだと判明するまでは。「例えば」——例をあげると、「あなたたちは判決を下した」——彼が少年たちを裏切った時だ、「あたかも」——まるで、「だれにも有無を」——私はユダのような男だと、<sup>(8)</sup> 「言わせぬように」——言わんばかりに！こうしたことすべてがチーズマン爺さんにとっては非常にこたえたようでした。彼はあまり髪が多い方ではなかったのですが、その少ない髪が日ごとにだんだん薄くなり始めたのです。顔はますます青白くやつれ、夕方など時たま、燃え残ったロウソクの芯がかなり長くなっても放置したまま机に座り、両手を顔にあてがって泣いている姿が見られました。しかし、協会のメンバーはそうしたくても、誰ひとりとして彼を哀れむことができませんでした。あれはチーズマン爺さんの良心がとがめている証拠だ、と会長が言ったからです。

チーズマン爺さんの生活はそんなふうでしたので、悲惨な生活を送っていたに違いあり

ません。校長が彼を鼻先であしらったのはむろんのこと、もちろんあいつも同じことをしました——何しろ、この夫婦は先生に対してはひとり残らず常にそうしていたのですから——とはいえ、最も悩まされたのは仲間たちからで、チーズマン爺さんは絶えず苦しんでいた様子でした。いずれ協会がそのことを分かってくれるだろうと思い、彼は他言したりしなかったのですが、だからといって信用を回復したわけではありません。他言しないのはチーズマン爺さんが臆病である証拠だ、と会長がまたしても言ったからです。

彼にはたったひとり味方がいましたが、それがまた彼と同じように影響力のない友達でした。何を隠そう、それはジェーンだったのですから。ぼくらの仲間たちにとって、ジェーンは衣装係のようなもので、衣装箱の管理をしておりました。最初ここに来た時は、年季奉公人のようなものとしてだったと思います——仲間の中には慈善学校出身だと言う者もいましたが、ぼくにはよく分かりません——それで年季が切れると、彼女は一年につき雀の涙ほどの給金で、そのまま学校に留まったそうです。蚊の涙ほどだった、と多分ぼくは言わなくてはならないでしょう。そう言った方がずっと真実に近いのですから。しかし、彼女は貯蓄銀行に何ポンドかの貯金があり、若いのにすごく立派な女性でした。お世辞にもかわいいとは言えませんが、とても素直で正直そうな、晴れやかな顔をしていたので、ぼくらの仲間はみんな彼女のことが大好きでした。彼女はまれに見るほどさっぱりしていて元気がよく、まれに見るほど落ち着いていて親切でした。母親のことで仲間のひとりに何か困ったことが生じた際には、その難儀を知らせる手紙をジェーンの所へ必ず見せに行ったものです。

ジェーンはチーズマン爺さんの親友でした。協会が彼に敵対すればするほど、その分ジェーンが擁護しました。時折、彼女は食料品貯蔵室の窓から彼に愛想のよい顔を見せることがありましたが、そんな日は彼も元気が出て来るようでした。また、果樹園や家庭菜園から（そうですとも、いつも錠は下ろされたままでしたよ！）出て来たあと、彼女は別の道を通ろうと思えば通れたのに、「元気を出しなさい！」と言わんばかりに、わざわざチーズマン爺さんの方に顔を向けるためだけに、運動場を通り抜けて行ったものです。彼の細長い部屋は奇麗に整理整頓されていましたが、彼が教壇に立っている間に、誰がその部屋の掃除をしているのか知らない生徒はいませんでした。昼食の時などは、湯気の立つほどほかほかの蒸し団子が彼の皿だけにのっているのを見て、ぼくらの仲間たちは誰が出したのか知るや、はらわたが煮えくり返る思いがしたそうです。

こういった状況下で、協会は度重なる会議と討論の結果、チーズマン爺さんには知らぬ顔の半兵衛を決め込むようにジェーンに要求すべきだ、そして拒否された折には彼女自身も村八分にせざるを得ないと決議しました。<sup>9)</sup> そういうわけで、会長率いる代表団がジェーンを表敬訪問すべく任命され、協会が断腸の思いで承認せざるを得なかった票決の結果を知らせることになったのです。ジェーンは、その善良な資質ゆえに大層みんなから尊敬されており、かつて校長の書斎で待ち伏せして、その優しく哀れみ深い愛情から仲間のひとりを助け出し、厳罰を免れさせてやったという逸話まであります。このため代表団は任

務遂行にあまり気乗りがしませんでした。しかし、代表団はジェーンの所へ行き、会長がすべてを通達しました。すると、ジェーンは顔を真っ赤にして急に泣き出してしまい、会長と代表団に対して、普段とは全く違った態度で、みんな幼いけれど敵意に満ちた野蛮人の集まりだと言い捨てるや、代表して来た者たちをひとり残らず部屋から追い出してしまいました。その結果、協会の記録簿には（発覚を恐れて膨大な暗号で付けられていましたが）ジェーンとのあらゆる交際を禁ずる旨が記入され、チーズマン爺さんの策略を裏づける今回のことについて、会長はメンバーたちになるほどと思わせるような演説を行ないました。

しかし、チーズマン爺さんがぼくらの仲間に対して不実な友であったように、ジェーンはチーズマン爺さんにとって忠実な友だったのです——いずれにせよ、みんなの意見はそうでした——しかも、何が起ころうと常に彼の唯一の味方でありました。それがまた協会にとっては大きなしゃくの種だったのです。ジェーンは彼にとって利得であったように、協会には損失であったからです。このため、協会は前にも増して敵意を抱き、彼を虐待するようになりました。ついにある朝、彼の机は空っぽとなり、部屋をのぞいても、もぬけのからであることが分かったので、真っ青な顔になった仲間たちの間では、チーズマン爺さんはもはや堪え切れなくなり、朝早く起きて身投げをしたんだといううわさが広まりました。

朝食後の他の先生たちの怪訝そうな面持ち、そしてどんなにチーズマン爺さんを待ち設けても現われないという明白な事実のために、協会はそのような見方をますます堅持するようになりました。仲間たちの中には会長が絞首刑に処せられるのか、あるいは終身の流刑だけで済むのか、<sup>(10)</sup> 議論を始める生徒までいましたので、会長の顔にはどっちになるか早く知りたくてたまらないといった表情が浮かんでおりました。しかし、彼は自分の勇敢さを我が国の陪審員たちに分からせてやるつもりだ、大英帝国人として密告者など是認できるものかどうか、また自分自身が密告などされたらどう思われるか、胸に手を当ててはっきり述べていただくよう、答弁の中でお願いするつもりだと言い張りしました。協会の中には、木こりと服を交換して顔にクロイチゴを塗りたくることのできるような森が見つかるまで、会長は逃げ延びるべきだと考える者もいましたが、大多数の者は、たとえ彼が一步も引かずとも、親父が——何せインド諸島にいて数百万ポンドの財産があるのですから——金を出して助けてくれるだろうと信じていました。

校長が入室を済ませ、一席ぶつ前の慣例として、定規を振りまわしながら自分を古代ローマ人か陸軍元帥かのように見せかけた時、ぼくらの仲間はみんな心臓がどきどきしました。しかし、校長が次のような話を始めた際のみみんなの驚きに比べたら、そんな恐怖は物の数ではありませんでした。チーズマン爺さんは、校長が言うには「いと永きに互<sup>なが</sup>り我<sup>わた</sup>等<sup>われら</sup>が敬<sup>うやま</sup>ひし輩<sup>ともがら</sup>にして学<sup>まな</sup>ぶもあらまほしき曠<sup>あらの</sup>野<sup>たど</sup>を辿<sup>あんぎや</sup>りし行<sup>ほらから</sup>脚<sup>の</sup>の同胞」ですが——ああ、そうです！恐らくそうでしょう！ほとんどそのとおり！——父親の希望に逆らって結婚したために勘当された若い女性の忘れ形見だったのです。彼女自身、若い夫の急死による悲しみが

原因で死んでしまい、あとに残された薄幸の乳飲み子は(チーズマン爺さんのことですが)、幼児の時も子供の時も、更に大人になっても決して会うことを承諾しなかった祖父の養育費で育てられたのです。このたび、その祖父が亡くなり、ぼちが当たり——おっと、これはぼくの余計な口出しでした——その大いなる遺産は、遺書がなかったので今や突然、未来永劫にチーズマン爺さんのものになったのであります! 「いと永きに互り我等が敬ひし輩にして学ぶもあらまほしき曠野を辿りし巡礼の同胞は」、そう言って校長はまたかとうんざりするような長い引用を終えたのですが、二週間後の今日、もっとちゃんとした形で自分の口から別れを告げるために、「今一度我等が許に御座します」とのことでした。このように言い残すと、校長はきつい目付きでぼくらの仲間を見渡し、おごそかに退室して行きました。

これにはさすがの協会のメンバーたちも度肝も抜かれました。仲間の多くが協会を脱退することを望み、更に多くの者が自分は協会なんか属していなかったんだとうそぶく始末でした。しかし、会長は一步も引こうとはせず、我々は生死を共にしなければならないのだ、協会の一枚石に穴を開けようというのであれば、ぼくの死骸を乗り越えてやってもらおうか、とたんかを切りました。この言葉は協会を叱咤激励するためのものでしたが、効き目はありませんでした。会長は続けて、我々の現在の立場をじっくり検討してみるから、一番いいと思われる意見と忠告を示すまで数日待ってくれと言いました。このことに切実な期待がかけられたのは当然です。何しろ彼の親父は西インド諸島にいるのですから、彼もまた世の中のことに精通していたはずです。

何日も何日も精一杯考え抜き、石板のあらゆる所に軍隊の絵を描きまくったあと、会長はぼくらの仲間を招集し、今回の難局を明らかにしてくれました。会長が言うには、約束の日にやって来た時、チーズマン爺さんが真っ先にする復讐は、協会を告発してから、そのメンバーを次から次にむちで打たせることであり、これは間違いないとのことでした。そして、敵方が苦しむ様子をさも満足そうに眺め、苦悶のあまり発せられる泣き声をほくそ笑んでから、どうやら次は、お話がありますという口実で校長を個室に——例えば一度も使われたことのない地球儀と天球儀が置いてあって、父兄がいつも通される客間へ——招き入れ、そこでチーズマン爺さんが堪え忍んだ校長自らの手による数々の弾圧と不正行為を非難するだろう。その上、チーズマン爺さんが言いたいだけ言って合図を送ると、廊下に隠れていたプロボクサーが立ち所に姿を現わし、人事不省に陥るまで校長をとことんぶん殴るだろう。それから、チーズマン爺さんはジェーンに五ポンドないし十ポンドのプレゼントをして、極悪非道にも勝ち誇って学校をあとにするだろうとのことでした。

会長は更に説明を続け、こういった筋書きの客間やジェーンの部分に対しては何も異存はないけれど、協会に関する部分には飽くまで抵抗しようではないかと言い出しました。この目的のために利用できる机にはすべて石を詰め込んでおき、チーズマン爺さんがひと言でも不平を鳴らしたら、それを合図にみんなそろって同時に石を投げようではないか、とも言いました。この大胆不敵な提案は協会の志気を大いに高め、満場一致で採択される

ことになりました。早速、チーズマン爺さんの等身大の柱が運動場に立てられ、この柱が全面ボコボコになるまで、ぼくらの仲間はみんな投石の練習に励んだのであります。

いよいよ当日になり、「着席」という声が響き渡ると、仲間の者たちはみんな腰をかけながら、ぶるぶる震え始めました。チーズマン爺さんがどうやって来るかについては議論に議論を重ねていたのですが、そろいの服を着たふたりの召使を前に、変装したプロボクサーを後に乗せた四頭立ての凱旋車のようなもので現われるだろう、というのが一般的な意見でした。それで仲間たちは全員、車輪の音を予期して聞き耳を立てながら座っていました。だが、車輪の音は一向に聞こえません。結局、チーズマン爺さんは何の支度もせずに、学校へ歩いてやって来たのです。昔とほとんど変わりなく、黒い服だけを着了た姿でした。<sup>(11)</sup>

「諸君」と校長は言って彼を紹介しました。「いと永きに互り我等が敬ひし輩にして学ぶもあらまほしき曠野を辿りし巡礼の同胞が、ひと言ふた言、お話になりたいと申されております。諸君、ひとり残らず、謹聴！」

ぼくらの仲間はひとり残らず机の中に手を忍ばせて会長の方を見ました。会長は準備万端おさおさ怠りなし、チーズマン爺さんに対して目で狙いを付けていました。

その時、チーズマン爺さんがしたことといえば、昔の机の所へ歩いて行き、目にひと粒の涙が浮かんでいるかのような奇妙な笑顔で周囲を見渡し、震え声で話を始めただけでした。

「我が親愛なる仲間の旧友たちよ！」

仲間たちの手が残らず机から出たかと思うと、会長が突如として涙を流して泣き始めました。

「我が親愛なる仲間の旧友たちよ」とチーズマン爺さんは続けて言いました。「もう私の幸運についてはお聞き及びのことでしょう。この屋根の下で私は長い年月を——今のところ私の全人生と言ってもいいかも知れませんが——過ごしましたので、皆さんも私のために喜んでくださっているものと思います。皆さんと祝辞を取り交わさないことには、私は素直に心から喜べないんです。少しでも私たちの間に誤解があったとすれば、どうか我が親愛なる生徒の皆さん、お互い水に流すことにいたしましょう。私は皆さんに大きな親愛の情を抱いていますので、きっと皆さんも報いてくださることと思います。今は感謝の気持ちで胸が一杯であり、皆さんひとりひとりと握手がしたくてたまりません。我が親愛なる生徒の皆さん、そのために私はお許しを得て戻って来たわけなんです。」

会長が泣き始めてからというもの、他の仲間も数人あちこちで泣きくずれていました。チーズマン爺さんがまず手始めに棟梁生徒である会長を選び、左手を愛情深く相手の肩に置いて右手を差し出すと、そして会長が「とんでもありません、本当に。誓って、ぼくにそんな値打ちはありません」と言うと、学校中にすすり泣きと叫び声が聞こえました。他の仲間も全員、会長とほとんど同じように、「とんでもありません」と言ったのですが、チーズマン爺さんは少しも気にせず、いそいそと生徒ひとりひとりの所へ行って握手を交わし、全員の先生との握手で——最後に校長を片づけて——締めくくりとしました。

その時、いつも何らかの罰を喰らっている例のはなたれ小僧が、隅の方で「チーズマン爺さんに成功あれ！ばんざーい！」と、かん高い声をあげました。校長はじろりとにらみつけ、「こら、チーズマン先生だ」と言いましたが、チーズマン爺さんが先生よりも爺さんの方がずっとよい呼び名だと申し立てたので、ぼくらの仲間は全員はなたれ小僧の叫び声を繰り返しました。それに続いて、正確には何分間かは分かりませんが、足の踏み鳴らしと拍手の大響音、それから「チーズマン爺さーん」と叫ぶ大きな声が起こりました。あんなのは今まで聞いたこともありません。

そのあと、食堂にはこの上なく豪華なごちそうが並べられました。トリ肉、舌肉、砂糖漬け、フルーツ、お菓子類、ゼリー、ニーガス酒、<sup>(12)</sup> 神殿型の大麦糖、<sup>(13)</sup> トライフル、<sup>(14)</sup> クラッカー、—— 食べられるだけ食べて、好きなものは何でもポケットへどうぞ—— すべてチーズマン爺さんのおごりです。お次は、スピーチ、終日のお休み、あらゆる種類のゲームに二重・三重のあらゆる種類の道具、ロバでも仔馬の遊覧馬車でも遠出を御自由にどうぞ、先生方には七鐘亭<sup>セヴン・ベルズ</sup>での宴会（ぼくらの仲間の見積もりでは一人当たり何と二十ポンド）、毎年この日はごちそう付きの祝日に、ついでにチーズマン爺さんの誕生日も祝日にしてしまえ——あとで約束をほごにされてはたまらないということで、校長は仲間たちの前で祝日を認めると誓約させられました——もちろん全部チーズマン爺さんのおごりです。

ところで、ぼくらの仲間たちが徒党を組んで七鐘亭へ押し寄せ、歓呼の声をあげなかったかですって？まあ、滅相もないことです！

しかしながら、他にも驚嘆すべきことがあります。次の話し手の方なんかを見ないでください。というのは、まだお話することがあるのですから。翌日、協会はジェーンと和睦を結んでから解散する、という決議がなされました。けれども、ジェーンが姿を消したことをどう思われますか？「何ですって？ずっと戻って来ないんですか？」仲間の者たちは浮かぬ顔で尋ねました。「確かだよ」というのがみんなの得た唯一の返事でした。寄宿寮の関係者は誰もそれ以上は教えてくれません。それでとうとう、棟梁生徒である会長が、ぼくらの旧友ジェーンは本当に行ってしまったのかどうか、校長に思い切って尋ねてみました。校長は（家には——獅子鼻で赤毛の——娘がひとりいますが）厳しい口調で「そうだ、ミス・ピットは行ってしまわれたのだ」と言葉を返しただけでした。ジェーンのことを事もあろうにミス・ピットと呼ぶなんて！彼女はチーズマン爺さんから金を受け取ったかどで不興を買い、暇を出されたと言う者もいましたし、一年につき十ポンドの昇給でチーズマン爺さんに雇われて行ったんだと言う者もありました。とはいうものの、ぼくらの仲間に分かっていたことは、彼女が姿を消したということだけでした。

それから二、三ヶ月後のある日の午後のことでした。一台の無蓋馬車がクリケット場の境界線のちょうど外側に止まり、中にいた紳士と淑女がしばらくの間ゲームを眺め、そのまま立ち上がってプレーの様子を見守っていました。ところが、誰も最初はふたりのことを気に留めていなかったのですが、はなたれ小僧が競技規定をことごとく無視し、<sup>スカウト</sup>野手としての自分の持ち場を勝手に離れて打席に入り、「あれはジェーンだ！」と叫んだのです。

両軍の選手たちはすぐさま試合のことを忘れ、群をなして馬車の周りに走って行きました。それは本当にジェーンでした！あんな婦人帽までかぶって！それに、ぼくの話信じていただけないかも知れませんが、何とジェーンはチーズマン爺さんと結婚していたのです。

日ならずして、仲間の者たちが運動場でゲームに熱中している時、壁の高い部分と低い部分がつながっている付近に馬車が止まり、紳士と淑女がその中に立って壁越しにこちらを眺めている姿が、ほとんど定期的に目に付くようになりました。もちろん、その紳士はいつもチーズマン爺さんでしたし、淑女の方はいつもジェーンでした。

ぼくが初めてふたりを見た時、ふたりの様子はそんなふうでした。ところで、ぼくらの仲間たちの間でも、その頃には多くの変化が生じておりました。ボブ・ターターの親父の財産は数百万ポンドでないことが判明したのです！全くの素寒貧でした。ボブはすでに雇われ軍人になっていましたが、チーズマン爺さんがお金を出して、彼の除隊証明書を買って取ってくれました。しかし、そんなことは馬車とは関係のないことです。ふたりの乗った馬車が止まり、その姿が見えるや、ゲームに興じていた仲間たちの動きもすべて止まりました。

「それじゃあ、やっぱり私を村八分にはしなかったのね！」ぼくらの仲間が握手をしようと壁をよじ登っている時、ジェーンは笑いながらそう言いました。

「しない！しない！しない！」というのが四方八方からの声でした。

その時、ぼくは彼女の言った意味がよく分かりませんでした。むろん今では分かります。とはいえ、彼女の顔、それにその親切そうな態度が、ぼくは非常に気に入りました。そのため、仲間たちがすごく嬉しそうにふたりの周りに群がっていたにもかかわらず、彼女の方を——そして彼の方もまた——見ないわけにはいきませんでした。

ふたりはすぐさま新入りのぼくに気を留めてくれたので、ぼく自身もみんなと一緒に壁をよじ登り、握手をした方がよいだろうと思いました。他の仲間たちと同様に、ぼくはふたりに会えて本当に嬉しかったので、たちまち親しくなったことは言うまでもありません。

「残り二週間しかありませんね、休暇まで」とチーズマン爺さんが口を開きました。「誰か学校に残る生徒がいますか？誰かいますかね？」

実にたくさんの指がぼくの方に向き、「あの子です！」という実にたくさんの声があがりました。というのは他でもありません、それは皆さんが全員いなくなる年だったからです。そのことでぼくは随分しょんぼりしていたのですよ、本当に。

「ああ！」チーズマン爺さんは言いました。「でも休暇の間ここは寂しくなりますからねえ。あの子は私たちの所へ来た方がいいですよ。」

そういうことで、ぼくはふたりの心地よい家に行って、最高に幸せな時を過ごすことができました。男の子というものに対する振る舞いを実によく心得ておられる方たちです、あのふたりは本当に。例えば、男の子を劇場に連れて行く場合、実際にちゃんと連れて行ってくれるのです。開幕後に入ったり、閉幕する前に出たりすることはありません。ふたりはまた男の子の育て方に関しても心得ておられます。ふたりのお子さんを御覧になって

ください！まだ今のところ非常に小さいけれど、何て素敵な坊やなんでしょう！もちろん、チーズマン夫人とチーズマン爺さんの次にぼくが大好きなのはチーズマン坊やです。

というわけで、ぼくは皆さんにチーズマン爺さんについて知っていることを全部お話ししました。結局、大したお話ではなかったような気がします、いかがでしょうか？

## 訳 注

(1) 本篇の語り手「ぼく」は寄宿学校の「新入り (new boy)」という設定である。

(2) ギリシャ神話のグリュプス (griffin) はワシの頭と翼、ライオンの胴体から成る怪獣で、隠された黄金・財宝の番人と信じられていた。ここでは、校長が金を貯え、その女房「あいつ」が管理するという図式がある。

(3) 肉親がないことを暗示している。

(4) ダブルグロスター (橙赤色のチェダーに風味の似た高脂肪のチーズ)、チェシャー (大型平円形のチェダーに似たチーズ)、ダッチ (スキムミルクから作る赤い小さな球形のチーズ)、ウィルトシャー (硬く圧縮したきめの細かい円筒状のチーズ)。

(5) ドラクマは古代ギリシャの銀貨。出典は『ジュリアス・シーザー』四幕三場のブルータスの言葉から「誓ってもいい、たとえ自分の心臓を溶して、その一滴一滴の血の滴りでドラクマ貨幣を鋳ようとも、百姓どもの握りしめた掌から僅かな目くされ金を挽ぎとるために、不正手段を用いる気にはなれない。」(福田恒存訳)

(6) 『新約聖書』「コリント人への第二の手紙」十章一節を参照 — 「さて、(あなたがたの間にいて面と向かってはおとなしいが、離れていると、気が強くなる) このパウロが、キリストの優しさ、寛大さをもって、あなたがたに勧める。」

(7) ラテン語における代名詞の主格は、動詞の語尾変化で人称が分かるので、通常は使われない。

(8) 裏切り者ユダはイエスを銀貨三十枚で祭司長たちに売った後、自殺する。

(9) 「村八分にする (send to Coventry)」は、かつてコヴェントリーの住民たちが兵士を忌み嫌い、この地に派遣された兵士と交際しなかったことにちなむ。現在のコヴェントリーはバーミンガム市の南東にある人口約三四万の重工業都市。

(10) 英国の犯罪者植民地はオーストラリアのシドニー市にあるボタニー湾 (一七八八年からは八キロ北のポート・ジャクソン) 沿岸が特に有名。

(11) ここでは祖父の死に対する喪服を兼ねる。

(12) ぶどう酒に湯と砂糖を入れ、しばしばニクズクおよびレモンを加えた飲み物。最初に作った英国人フランシス・ニーガス大佐 (一七三二年没) にちなむ。

(13) 昔、大麦を煮た汁と砂糖を煮詰めて作ったねじれ棒状の飴があったが、その形を利用して作った神殿型のお菓子のことか。

(14) ジャムと砕いたマカロンをのせ、酒を振りかけたスポンジケーキで、カスタードと泡立て

た生クリームを添える。

## あとがき

底本としては、The Oxford Illustrated Dickens 版の Charles Dickens, “The Schoolboy’s Story,” *Christmas Stories* (London: Oxford UP, 1975) を用いた。この短篇は、1850年3月からディケンズが編集を始めた週間雑誌、『暮らしの言葉』(*Household Words*)において、彼自身が1853年のクリスマス特集号に寄稿したものである。

ところで、ディケンズは『暮らしの言葉』の創刊号の中で、「本誌の願いは、愛情あふれる〈暮らし〉の中に身を置き、読者諸氏の〈暮らし〉の伴侶に加えていただき（・・・）多くの愛すべき人たちの罪のない笑いと優しい涙（harmless laughter and gentle tears）に携わることである」と記している。要するに、平凡な〈暮らし〉の中における笑いと涙を媒体として、読者との密接な関係を維持することがディケンズの願いだったのである。そうした一般読者の笑いと涙を誘うような日常生活における人情の機微が、ここに訳出した「チーズマン爺さん」の中では学校生活の場に移され、いたる所でリアルに描き出されている。銭もうけに抜け目がない校長夫妻の経営する寄宿学校を、持ち前の皮肉と調刺によって揶揄するディケンズの筆致は、彼が一連の長篇小説の中で、当時の非人間的な唯物的功利主義に支配された、社会制度や公共機関の不備を当てこする際の筆致を彷彿させてあまりあるものがある。一方、軟弱だが極めて善良なチーズマン爺さんを裏切り者として虐待する会長と仲間たちに対するディケンズの態度は、あくどい校長夫妻の場合とは明らかに異なっている。ユーモアとペーソスを注いでチーズマン爺さんや生徒たちを描く時のディケンズの筆致には、寛大な温かい心をもって人間の欠点を赦すという基調が窺える。こうしたディケンズの全作品の底流をなす基調こそ、読者に「罪のない笑いと優しい涙」を催させる源泉だと言えるのではあるまいか。

最後に、この短篇の原題は「男子生徒の物語」であったが、邦訳では「チーズマン爺さん」に改めたことを断っておきたい。